

二. 角屋

現地入りして一週間ほど、圭介は工事の状況や現場の問題点、そして今後の進捗の見通しなどを調査して本社に帰っていった。今後の現地対応の仕方などを細かいところまで河島と相談し、必要になりそうな資料を揃えるためだった。ほぼ一週間が過ぎた頃に圭介は現地に舞い戻った。

角屋の広い玄関を黙って通ると、圭介は食堂を覗いてみた。もう九時になろうとしている。いつもなら、この時間には食堂には誰もいないのだが、この日に限って川村が隅のテーブルに一人で座っていた。前にはビールが一本だけ置いてある。

「おい、ちょっと待ってや」

圭介はそう言って、食堂と向かい合わせに廊下をはさんでいる台所を覗いた。若奥さんがせっせと食器を洗っている。

「この前のあの部屋でええんかいな」

圭介が声をかけると若奥さんが振り向いた。

「あら、真藤さん、いらっしやい。今度はいつまでいるの？」

「二週間くらいやな、たぶん」

「それじゃまたあの部屋使ってね」

圭介は頷いて階段のほうへ行きかかったが、また戻って来て言った。

「川村さんのところへビール四、五本運んどいてもらえんかな。いま食堂におるわ」

圭介はたった今着いたばかりだった。半日会社で仕事をし、午後三時頃出て新幹線に乗る。上野で東北本線に乗り換え、約一時間半でU駅に着く。U駅から角屋までは歩いて二、三分である。

顧客が関東に多いので、圭介は関東と関西を往復することが多い。そのために旅なれてしまっていて、列車に乗っていても旅情を感じるようなことは全くなくなっている。そのかわり旅に疲れることもない。圭介にとっては旅もビジネスの一部になりきっているのだ。

独身寮で同室の田中は、しょっちゅう旅に出ている圭介をうらやましがった。田中はシステム部勤務のため出張はほとんどない。田中にとっての旅はレジャーとして楽しむ旅以外には考えられなかったようだ。圭介が出張から帰ると、田中は出張先のことを色々聴きたがった。その都度圭介は言うのだ。

「休日にレジャーで旅をする奴の気が知れんね。そんな時間があったら、おれはこの町をもっとゆっくり歩いてみたいよ」

そうは言っても、田中には所詮わかるまいと圭介は思っている。もう五年近くも住みながら、圭介は本当に自分の住む町をあまり知らないのだった。

荷物を部屋に置いて圭介は急いで食堂へ戻った。ビールが六本テーブルの片隅に寄せて置いてあり、するめとピーナツの皿が川村の前に並べられていた。テレビに歌謡番組が映っていたが川村はそれに背を向けていた。圭介が入ってくるのを見て川村はビールを一本引き寄せて栓を抜いた。

「あちらのほうはどないでしたか？」

圭介の差し出すグラスにビールびんを傾けながら川村が訊いた。

「日中は相変わらずや。外はけっこう暑いし。このところ天気続きやったし」

「こっちはもう薄ら寒いですよ、陽が沈むと」

「そうやね、電車から降りた時、空気が冷たいのには驚いたな」

この前に来た時から十日はどが過ぎていた。

工事は大体予定通りだと川村は言った。お客さんはその後どうか？という圭介の問いに、相変わらずですよと川村は苦笑いしながら答えた。話題は工事のこまごまとしたことから秋山たちの話に変わっていった。

他人の悪口や噂話は、特にそれが共通の攻撃対象を得た場合、話に加わっている人たちの中に共感の環を広げるものだ。普段は事務的にしかものを言わぬ人が饒舌になり、うなづいたり、大声で相づちを打ったりするようになる。

圭介は河島主任といろいろ話をしてきた長い間に、このことに気付いていた。時々、圭介はこういう人間感情を利用するようになっていた。

果たして、川村は口数が多くなり、グラスは次々と干されていった。高木も秋山も二人の槍玉に上がりっ放しだった。

川村は圭介と同じ二十七歳の独身である。もともとあまり話し好きではない。ぼうよとした雰囲気のある川村の話し相手になれる者が少ないせいかもしれない。圭介が川村と話をするのも仕事上の必要があつてのことがほとんどだ。個人的な話など苦痛になるばかりで、とてもしていられないのだ。この男はおれの話をどう受けとったのだろうか。川村と話す者は誰もがそういう不安感を抱かせられた。付き合いの古い人たちは、そんな川村がどちらかという善人なのを知っていた。

そういう川村が宿では一人きりでいる時間が多くなるのは当然である。現場では仕事があるので業者たちは川村のまわりに寄ってくる。昼休みなども業者たちの雑談に川村もよく加わっている。大勢の中の一人でいる時には川村もさして苦にされてはいないようだ。

圭介と川村の間でこれだけ話がはずむのは初めてのことだ。酒を酌み交わしたことは以前にも何度かあったが、川村の上司の安田がいつも一緒だった。むしろ真藤と安田が飲んでいる席に川村が居たと言うほうが当たっているだろう。

「うるさいから消すでえ」

川村は立ち上がった。テレビの画像と音声が消えると一瞬の静寂があった。

「北山さんはうまくやってるんかいな」

圭介の問いに、これまで機嫌のよかった川村の顔が曇った。テーブルに戻ってから川村は口を開いた。

「何のことやね」

「川村さんも知っとるやろう。前の機械を据付けた時、高木さんや秋山さんと北山のおっさんがうまく行かんかったのを」

「ああ、それかいな。今はそんなこと関係あらへん」

川村は、一昨日のことだと言って話し始めた。

溶接棒のパチパチという音とパイプカッターの音が空気を振るわせていた。オイルセラーから上がって来た川村は、本体の前に渡してある板の上を通りかかった。下では北山が配下の若者と二人でライニングの溶接作業をしている。ようやく片側半分が完成しそうになっていた。川村は渡り板の上に立ち止まり、アークの光を避けて下を見下ろしていた。溶接棒のアークの音が耳に心地よく響いていた。

突然、北山が作業の手を止めて上を見た。視線が一瞬ぶつかってはじけた。北山はすぐ下を向いて完成間近の半分を見回しながら何かぶつぶつ呟いていた。川村は黙ってしばらくそこに立ち尽くしていた。

北山は若者を呼ぶと簡単な作業指示を与え、いきなり駆け上がって来て川村の肩をつかみながら言った。

「川村さん、ちょっと話してえことがあるんだけど、外へ来てくれねえか。ここはうるせえからよ」

川村は黙って従った。外へ出るとすぐ川村は、ハウスへ行こうと促した。長く続いた好天も終り、細かい雨が二日間降り続いていた。グラウンドの草の緑が雨に打たれてよみがえったようだった。

「ここでいいよ」

北山はそう言うなり振り返った。新建屋の東側の通用口を出た所だった。

「川村さん、仕事の関係だからおれは“さん”付けで呼ばしたもらうけどよ、昨日のあの口のきき方は何だよ」

「えっ……」

いきなり肩をドーンと突かれて川村はよろよろとして壁にぶつかった。北山が目
が鋭く光って川村を見据えていた。

「てめえは監督で、俺たちは業者に違えねえ。けどよ、金を追加しねえで余分の
仕事をやらすのにあんな言い方するもんかよ。俺は仕事量が少々増えたって何とも
思っちゃいねえ。ただ、てめえの言い方にはどうにも腹の虫がおさまらねえんだよ・
・・・」

川村はすぐに思い当たった。前日秋山に呼ばれ、ライニングの溶接位置が悪いから
やり直してほしいと言われた。その時秋山は一言付け加えたのだ。

「川村さんもご存知のように、この一号機は北山組が全部の工事をやったんですよ。
その時は随分苦勞しましたからね。北山さんも一緒に苦勞したんで、今度もいろいろ
北山さんには相談をかけたりにしてるんですよ。川村さんも、もっと北山さんとよく
相談して進めてほしいんですわ。・・・」

関西なまりの標準語が川村の耳に粘り着いていた。

川村にとっては意外だった。三ヶ月ほど前の工事打合せの時の秋山の顔が頭に浮か
んだ。あの時北山組の起用に難色を示したのは確かに秋山だったはずだ。

既に北山が知っていて諒解しているとばかり思った川村は、溶接位置を変えてライ
ニング工事の一部をやり直すよう事務的に言い渡したのだった。

「ここまでもう終わっているのにそんなのムチャだよ・・・」

北山は抗議した。

「自分から言い出したことやろ。秋山さんが言うてたんや。やってくれんのやったら
金払われへんで・・・」

「おれはそんなこと言ってねえぞ」

川村は北山の言葉を聞き流した。秋山と北山が自分の頭越しに相談していることに
腹を立てていて、北山の言葉に耳を傾ける気持になれなかったのだ。

壁によりかかったまま川村は北山が怒鳴り散らすのを聞いていた。秋山の言葉を
一方的に信用したのを悔いていた。北山は秋山と話したのは一号機の工事の思い出話
くらいだと言った。

「あんたの言う通りなら、わしが悪い。気が済むんやったら殴れ。殴ってもええ」

北山は川村の襟首を掴んで壁に押し付けた。川村は、殴られるな、と思った。

「この若造が生意気なことを抜かしやがって。監督づらしてやがるけど、おれたちと
同じ工事屋じゃねえか。今度やりやがったら、ただじゃすまねえからな。この野郎」

北山は手を放した。

「おれはやり直しはしねえぞ。油が洩れなきやいいんだろ。後でグラインダーを
かけて調べるけどよ、あれで絶対洩れやしねえ」

「・・・」

髭をピクピクさせながら北山は仕事へ戻っていった。

「こんなことは真藤さんに言うことやないと思っていたんやけどね。工事屋どうしのいさかいやし」

「それにしても秋山さんには皆いじめられるなあ」

秋山には確かに小うるさいところがある。しかし、言うことは一応理にかなっていることが多く、新設備をより良い状態に据え付けようという熱心さの現れと、圭介は受け止めていた。だが今夜の川村の話は、秋山に対する不信の芽を圭介の心の中に生み出したのだった。

若奥さんが顔を出した。

「なあんだ、二人だけだったの……。そろそろ十時半になるから終りにしてもらえないかしら……」

「あれ、ほんまや。真藤さん風呂未だやろ」

「いいよもう今日は……。ところで川村さんはもう随分ここで暮らしとるんやろ。なあ奥さん」

「そうねえ、三月の初めからだわね。その間二週間くらいだったかな、部屋を空けていたのは」

「うーん……。もうこの家の息子みたいなもんやな」

川村は笑って聞いていた。まんざら悪い気もしないようだった。

春から夏にかけて、川村はU市の現場に入っていた。角屋からバスで15分ほどの所だった。その工事が終り、今度の工事が始まるまでの半月くらいの期間がブランクになった。その間に川村は関西の自宅に帰っていたのだった。これから12月まで、角屋は川村の生活の場になるはずだった。

北山組や他の業者たちは工場の最寄駅近くに宿を取っていた。指導員の高瀬はその駅より一つ東京よりの駅の近くに根城を定めていた。川村は、住み慣れた角屋にいるのが一番気持ちが休まるような気がして、U駅からの二駅を電車で通っているのだった。

「そやけど、こんな生活は嫁さんもらうまでやなあ。うちの安田さんを見とったら気の毒になるわ。出稼ぎ農家は半年やろうけど、わしら一年中やもんな。一年のうち一ヶ月くらいしか家におられんこともあるし、家庭生活なんか成り立たんやろうと思うでえ」

川村の声が食堂の静寂の中に響いていた。若奥さんはテーブルを離れて窓のカーテンを引きにいった。テーブルの一点に視線を落としたまま圭介は席を立った。

「さあっ、もう寝ようや」

圭介と川村が階段を上っていき、蛍光灯が消されると、食堂は静かな闇の中に沈んだ。